

あとがき

無償労働の貨幣評価は、1995年の北京女性会議における行動要領で、価値はあるが可視化されない女性の家を中心とした労働をGDPと比較しその活動量を可視化しようという試みであった。筆者が社会人であった、1996年から1997年に旧経済企画庁で実施された「無償労働の貨幣評価について」を担当したが、この無償労働の貨幣評価は歴史的にも大変根深い背景を持っており、担当を離れても問題意識を持ち続けていた。当時は、自身が介護、仕事、家庭の仕事に追われ、毎日が戦いの場であったので深く考える余裕が全くなかったが、定年退職し、本格的に考える余裕ができたという事もあり、また長年業務として担当してきたSNAとの接点としての無償労働の貨幣評価を初心に戻って勉強してみたいという思いに駆られ、SNAの権威である専修大学教授の作間教授の門をたたいてみた。快くお引き受けいただいた時には、心から喜んだと同時に、老いと向き合う自分を確認する勉学となった。

多くの女性が携わる家計の労働はSNAの体系の生産の境界に入っていない活動であるが、市場と同等の価値のある活動として一般的な生産の境界内の活動と位置づけられている。賢い主婦によって、「家計の切り盛り」を行い、家計内福祉を一身に担ってきた家計内労働は、「タダの労働」とみなされてきた故に女性の地位は不当に安く見積もられてきたともいえる。家計は人々の安らぎの場でもあり同時に社会的訓練の場でもあり、社会の単位として大きな役割があり、家計を構成する人々が支え合う場で中心的な立場の主婦の労働の地位が低いということは、それぞれが尊敬しあいながら生活を行なうためには大変不幸なことであった。その家計労働が貨幣評価されることによって社会で働く人と同等の地位が与えられることは、十分に意味のあることである。家計の営みは社会の営みと深い接点を持っている故に、その変容に敏感に且つ十分に考えたうえで対処するには無償労働の貨幣評価だけではなしえない問題が多く含まれている。一つは社会保障であろうし、もう一つは女性の就労であろう。女性の就労は家計内労働を減少させることにつながると同時に市場価格にも影響を及ぼすことにもなること、それと同時に育児や介護も従来の家計だけで担われるのではなく社会の共同の枠組みで考えることになるとすれば、政府サービスに対する社会負担と受益が大きいかかわってくると同時に社会構成が新たな変容に向かっていくとも考えられる。こういった関係をよく理解し、自身の行動を決定するためにもその根拠になっている事柄をよく理解することが必要であろう。筆者は長年共働きをしてきており、一人の人間として自立して生活することをモットーとしてきており、女性の社会進出を喜ぶものであるが、その女

性の社会進出は女性にとってはうれしい事ばかりではないのである。そして、女性は子供を授かる性でもあることをよく認識し、そのことに無理のない社会形成を行う上でも、男女が無償労働に向き合うことが必要であるという意味で、そして社会の合意形成がなされる必要があると思われる。また、統計を考える立場から見ると、女性の社会進出に伴う有利、不利を判断できるマクロ的な意味で可視化される家計勘定が見当たらないという問題意識があり、家計勘定を勉強し、今回その原型が作成できたと感じている。この勘定を作るにあたって、女性にまつわる統計の不備にも気づかされた。女性の立場からみると活動時間として妊娠・出産に伴う生活時間の変容などは統計の対象とはされていない。産後のケア活動も活動として入っていない。そのためには、現在の統計慣行となっている「第三者基準」の見直しが必要であるのは言うまでもない。このことに関しては多くを作間教授から指導を受けた。その視点に立ってみるならば、女性の問題を生活時間から考えていく統計調査が行われる必要があることを痛感する。

本論は、同教授の指導を得ながらこのような問題意識を明らかにしてきたつもりである。この貴重な勉強の時間に忍耐強く、時には呆れながらご指導いただいた同教授には心から感謝をささげると同時に、研究者としての姿勢の厳しさにも心から敬服した。また、美智子夫人にもお会いするたびに励ましていただいたことに心から感謝する。

そして、この研究に、伊藤陽一法政大学名誉教授、福島利夫専修大学教授、奥本佳伸千葉大学教授、林英機前新潟大学教授、李潔埼玉大学教授、天野晴子日本女子大学教授、牧野好洋静岡産業大学准教授、宇南山卓一橋大学准教授（財務省財務政策総合研究所総括研究官）、鈴木奈穂美専修大学准教授、櫻本健松山大学准教授、近藤正彦専修大学兼任講師（前（株）三菱重工調査部長）、橋本美由紀法政大学大原社会問題研究所研究員、岡田多恵大東文化大学兼任講師、浜田浩児内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官、萩野覚内閣府政策企画調査官、守屋邦子内閣府上席政策調査員、竹内維斗文内閣府上席政策調査員、二上唯夫日本リサーチ総合研究所研究主幹、等々多くの方から貴重なコメントを頂いたことに感謝する。

長い学生生活でわからないことに親切に対応いただいた大学院の職員の方々にも感謝する。

最後に、わが夫 佐藤繁夫も忍耐強く悪妻を支えてくれたことに感謝する。